



国民の森林・国有林

中部森林管理局

〒380-8575 長野市大字栗田715-5

☎050-3160-6513

<http://rinya.maff.go.jp/chubu/>

広報

中部の森林



伐採・造林一貫作業システム説明会の様子(東信署)

～林業の低コスト化に向けて～

東信地方で初めての伐採・造林一貫作業システム説明会の開催

主な項目	○ 国有林モニター会議(現地見学)	P2
	○ 各地からのたより	P6
	○ 寄稿 森林鉄道の終わる頃	P7
	○ シリーズ「森林官からの便り」	P8
	○ シリーズ「ご当地自慢」	P10

国有林モニター会議 (現地見学)

【企画調整課】十月八日、東侯国有林外（南信森林管理署管内）において、国有林モニター会議（現地見学）を開催しました。

現地見学は、東侯国有林（一・二六林班）において、田中南信署長から歓迎の挨拶を受けた後、松嶋森林技術指導官から南信署管内のシカ被害状況、対策、成果、職員による捕獲の方法、平成二十六年度中央アルプス地域での新たな取組等について説明があり、場所を林内に移動して「笠松式ワナ」の実演及び「囲いワナ」によるニホンジカ捕獲調査事業の概要等について説明が行われました。



ニホンジカ被害対策の説明を受ける皆さん

次に、「木の文化を支える森づくり」制度に基づき南信森林管理署と「御柱の



御柱候補木の説明の様子

森づくり協議会」との間で協定を結んでいる「御柱の森」（一・二三七林班）に移動し、平成二十八年諏訪大社御柱祭の御柱候補木を前にして南信森林管理署長から協議会の取組内容、候補木選定の経過等の説明が行われました。

その後、御柱祭の「木落とし坂」、諏訪大社春宮社殿の四隅に立てた「御柱」の見学を行いました。

今回の現地見学会では、国有林モニターの皆様から「シカ対策が如何に大変なのか分かりました。」「シカ対策は駆



木落とし坂を見学する様子

除が大切」「シカ肉の『ジビエ』料理への活用を図ることが必要」「御柱は親から子、子から孫に伝わる伝統行事であり継続が必要」といった感想が出されました。

中部森林管理局では、今回の国有林モニター会議（現地見学）でいただいた貴重なご意見を、これからの国有林野の管理経営に活かしてまいりたいと考えています。

第二回中部地区広域原木流通協議会

「名古屋事務所」十一月七日、TKPガーデンシティ名古屋新幹線口において、第二回中部地区広域原木流通協議会（会長(株)東海木材相互市場 代表取締役鈴木和雄）が開催されました。

協議会は、林野庁が国産材の安定的・効率的な供給体制の構築を図るため、平成二十五年度補正予算において広域流通体制確立対策事業の公募を行い、（一財）日本木材総合情報センター（代表）、全国素材生産協同組合連合会、全国森林組合連合会、（二社）全日本木材市場連盟の四者を補助事業者（共同実施）に認定し、全国を八ブロックに分けて進められてきたもので、五月二十二日の第一回に続き、今回で二回目となります。

今回も学識経験者として鹿児島大学農学部遠藤日雄教授をはじめ、林野庁、中部局、県（長野・静岡・岐阜・愛知・新

潟・富山・石川・福井県の八県）、各県の森林組合、林産・素材生産事業者・市場関係者、マスコミ各社等約四十数名が参加しました。



会議の様子

今回の協議会では、「中部地区広域原木流通協議会規約」が承認され、同規約第七条により、役員の選任が行われました。その後、鹿児島大学遠藤教授を座長とし、この間、補助事業者が取りまとめた「中部地区広域原木流通構想（案）」について検討が行われました。各県からは、特記すべき内容の追加、修正意見等について、意見が多く出され、これらの意見が今後、報告書に反映されることとなります。

次に、平成二十六年度の事業計画についても承認され、年二回の原木需給情報交換会議の開催、原木の共通規格による採材、仕分け基準の策定と講習会の実

施、原木安定供給研修の開催等が進められることとなります。

質疑応答では、今後、山側の供給体制の確保（集荷方法、雇用の確保など）、バイオマスの動き、木材の海外輸出、オリンピック・パラリンピック関連の木材需要の動き、為替の動向等について活発な意見交換が行われ、引き続き目的を達成するために活動等を行っていくことが確認されました。

林政記者クラブ国有林等視察

【総務課】十一月六日～七日の両日、林政記者クラブ（中部森林管理局管内加盟社）の国有林等視察を実施しました。

林政記者クラブ四社から四名が参加され、森林管理局からは次長、総務企画部長、名古屋事務所副所長、広報主任官が同行しました。

一日目は、東濃署会議室において、山元次長の挨拶、間島署長による東濃署の事業の取組等の説明がされました。

午後からは、加子母裏木曽国有林内の木曽ヒノキ備林を署長、小林主任森林整備官、小幡地域技術官の案内により視察を行いました。

一行は、裏木曽古事の森を通りながら、ヒノキとサワラが上下に合体して密着成長し、年輪が一つになった非常に珍しい合体木を見学しました。この合体木は、岐阜県の名木にも指定されており、



合体木を説明する間島東濃署長

樹齢は推定五百六十年、樹高三五メートルにもなります。

次に、第六十二回神宮式年遷宮により、平成十七年六月に執り行われた御用材伐採会場跡地を視察しました。

御用材伐採式とは、御神体を納める器となる「御樋代」用材を伐採する祭儀のことです。林道からしばらく歩道を登って行くと目の前に大きなヒノキの切り株が現れます。このヒノキの伐採には、伐倒方向が正確で芯抜け突き割れが少なく、古くから貴重材の伐倒に用いられてきた「三ッ緒伐り」と呼ばれている、斧を使用した古式法により行われたとの説明を受け、皆さん感心していました。伐採会場跡地を後にした一行は、遊歩道を

散策しながら二代目大ヒノキの視察に向かいました。この二代目大ヒノキは、初代大ヒノキが昭和九年の室戸台風により被害を受けたことから、急峻な山中を捜し歩きようやく昭和五十六年に発見されたものです。



二代目大ヒノキを視察

大ヒノキは威厳と風格を備えており、樹齢は推定千年、樹高二六メートル、胸高直径一五四センチメートルにおよびます。

二代目大ヒノキを後にして、裏木曽古事の森で説明を受けた後、高時谷（五色沢）復旧治山工事現場を視察し、急峻な箇所で行工事が実施されていることに皆さん驚いていました。続いて、初代大ヒノキの年輪板が奉納されている護山神社を視察しました。

二日目は、岐阜署管内の高天良国有林で森林技術・支援センターと岐阜署が共同で実施しているコンテナ苗の植栽試験地を森川岐阜署長らの案内により視察しました。中部森林管理局では、伐採から造林までの一貫契約を行い、主伐後の再造林の低コスト化に向けた取組を行っています。当日は、森林技術・支援センターの三村森林技術普及専門官、岐阜署の柴山森林技術指導官からコンテナ苗についての説明を受けました。植栽が容易で活着も良い等の特徴を持つことから今後、施業の低コスト化が期待されています。説明を受けた後、准フォレスト連携会議の参加者によるコンテナ苗の植栽を視察しました。



コンテナ苗の説明を聞く記者の皆さん

続いて、七宗国有林に移動し、岐阜署影山総括地域林政調整官らから二ホンジカ被害対策で実施している、くくり罠の

設置、移動式及び固定式の囲い罫の説明などが行われ被害対策の重要性や野生動物との共存の難しさを認識されたようでした。

最後に、岐阜県瑞穂市で県内では初となる間伐材等未利用木材を主な燃料とする木質バイオマス発電所を視察しました。

全体計画では、燃料として年間約九万立方メートル（未利用木材約六万立方メートル、一般木材約三万立方メートル）の木材が必要になるとの説明がありました。

本視察を通し、中部局が地域に貢献しながら事業に取り組んでいる等のPRができたのではと考えています。各視察箇所、林政記者クラブの皆さんから多くの質問もいただき有意義な視察となりました。

今後このような機会を設け、中部森林管理局の取組について効果的に情報発信に努めていきたいと考えています。

准フォレスター連携会議

「技術普及課、岐阜署、森林技術・支援センター」十一月六日～七日にかけ岐阜県下呂市で准フォレスター連携会議を開催しました。この会議は、准フォレスター研修終了生等が一堂に会し、森林施業プランナーとの意見交換やコンテナ苗植栽などの知見を深めることを通じ今後

の活動に生かすことを目的に開催したものです。会議には、中部ブロック准フォレスター研修を受講した者など八県の民有林関係者十六名、中部森林管理局職員二十五名が参加しました。

一日目の全体会議では、フォレスターとして活動を進めていく際、森林施業プランナーとの連携が重要であることから、岐阜県西南濃森林組合の高木啓晶業務係長と公益社団法人岐阜県森林公社の坂本仁技術主査の二名にプランナーとしての活動報告や参加者から事前に聞き取った質問事項などについて回答していただく形で意見交換を行いました。

フォレスターに望むこととしては地域の調整役になっていただきたい、地域のプランナーとの座談会を開くなど意見交換の場を作ってみてはどうかといった提案をいただきました。

その後、（独）森林総合研究所林木育種センターの藤原優理原種係長から「林業用種苗の生産と配布」と題し林業用種苗生産の現状や林業用種苗に関する制度等について講義をしていただき、エリートツリーの開発見通しなど育種体系の基礎を学ぶことができ大変有益なものとなりました。

二日目は、岐阜森林管理署管内高天良国有林において、井上森林技術・支援センター所長らによるヒノキコンテナ苗や専用植栽器具などの説明の後、コンテナ苗約三百本を、いろいろな専用器具で試

しながら植栽を行いました。今後コンテナ苗を推進していく上で実際に植栽体験ができたことは有意義であり、器具の違いで植栽工程が違うことや注意点が理解できたとの声がありました。

その後、七宗国有林においてニホンジカ被害対策として設置した囲いワナについて岐阜森林管理署の影山総括地域林政調整官から、また、くくり罫について七宗町猟友会長谷部副会長から設置の際の注意点等を聞き、シカ対策が待たなしの状況であることを認識した、他地域での取組事例は新たな知見が得られ参考になったといった意見がありました。

二日間を通じ参加した者の情報交換、技術・知識の共有の良い機会となり、次回開催を望む声もあることから、各県職員、国有林職員双方の弱点を補完できる



コンテナ苗植栽現場での集合写真

ようなメニューなどを検討し、フォローアップ、連携の取組を進めていく予定です。



囲いワナの概要説明

「地域と共に」

熱田区民祭りに出展!

「名古屋事務所」十月十二日に「熱田区民まつり（主催 熱田区民まつり実行委員会）」が中部森林管理局名古屋事務所に隣接する白鳥公園において開催され、名古屋事務所からも参加しました。

今年は、「街道が、ひとが、まちが、つなげる 熱田」をテーマに歴史文化の魅力を発信するため、街道宿場市として、東は岡崎宿、西は桑名宿、北は下呂、加子母、木曽（広域連合）など八つの宿場町（地域）からも参加され、楽し

さおいしあふれる賑やかなブース、お獅子の練り歩きや、和太鼓の音が響くステージイベントなど盛りだくさんに催され、当日は台風十九号の接近が危ぶまれる中でしたが、その影響もなく多くの市民が訪れました。

名古屋事務所では毎年ブースを出展しており、地域と共に歩む「国有林」の顔として、区民祭りを盛り上げてきました。今年も「木とのふれあい」として「サクラの枝を使ったストラップづくり」のコーナーを開設し、少ない職員ながら慌ただしく対応しました。



ストラップづくりに夢中の参加者

ブースでは待ち時間が出るほどの盛況で、子供から大人まで総勢二百人近くがストラップづくりに参加しました。参加者らは、完成品の成果に一喜一憂しながらも「ありがとう」、「楽しかった。」などの声が聞かれ、森林とのふれあいを堪能

能しているようでした。

今後とも国有林の川下の窓口として、地域とのつながりを大切に川上と川下との連携や木材消費地での情報発信に努めてまいります。

実践研修

「森林技術・支援センター」平成二十六年実践研修（中部ブロック研修）を十月十五日～十七日までの三日間、下呂温泉旅館会館及び岐阜署管内の神割国有林ほかをフィールドに実施しました。

この研修は、森林総合監理士（フォレスト）活動を実践していく上で必要な知識・技術を補強し、若手技術者のレベルアップを図ることを目的として行うもので、中部ブロックでは「急傾斜地における間伐実行方法と有利販売に向けた採材・木材流通」をテーマに、中部地方な



架線系集材区域の遠望による作業システムの検討の様子

ど九県から県、市町村、国有林の職員の三十六名が受講しました。

地形条件や出材量、機械の保有状況等に応じた架線系システムに関する知識・技術が不足していると言われていたことから、研修では車輻系で対応できない急傾斜地の間伐の実施方法や、ニーズを踏まえた採材方法等について実践的な指導・助言ができるよう、国有林の間伐事業地、中間土場、木材市場において意見交換を実施し、知識・技術の習得に取り組んでいただきました。

受講者の皆さんには、今回の研修で得られた知識・見聞きした事例を各地域での森林総合監理士（フォレスト）活動に活かしていくことが期待されることです。

ESDユネスコ世界会議 併催イベント

「名古屋事務所」ESDユネスコ世界会議が十一月十日～十二日の間、名古屋市「国際会議場」で開催されました。

開会会合には皇太子ご夫妻も出席され、世界百カ国、約千人以上が参加し、地球の未来を担う子ども達の教育について様々な分野から議論が重ねられました。

十一日には、（公社）国土緑化推進機構が主催する併催イベント「企業・NPOと学校・地域をつなぐESDフォーラム」のワークショップが、名古屋事務所

の「林業の歴史と木材利用展示室」において開催されました。

ワークショップでは、前日に実施されたエクスカージョンで学んだことをどのように応用するか、各地でESDを推進するための課題などについて報告された。また、社会貢献活動でESDに取組む企業・NPOから活動報告され、その後「場・プログラム」「人材」「資金」「体制」「評価」をテーマに、NPO法人国際理解教育センター理事代表の角田尚子氏が議事進行を務め、グループ会議が進められました。



グループ会議の様子(発表)

参加者は府県の普及担当職員のほか森林環境教育を積極的に進める企業やNPO団体などで、北は秋田県から南は高知、福岡県まで幅広い地域から二十八名が参加し、各テーマの課題に対して個々の経験や考えを出し合い、取りまとめら